

Psychonomic Society Meetingに参加して

澤 幸祐

本年度海外出張旅費の支給を受け、シアトルで開催されたPsychonomic Society Annual Meetingに参加したので報告する。本学会は、北米を中心とした基礎心理学領域の学会であり、ヒトや動物など幅広い対象を用いた研究が報告されるもので、基礎心理学領域の学会では最大規模のものの一つである。筆者は本学会にはほぼ毎年参加しており、その都度研究成果について報告を行ってきたこともあって馴染み深い学会である。本学会の特徴としては、基礎心理学領域を幅広くカバーする点もさることながら、学会開催時期に合わせて様々なサテライトシンポジウムが企画される点をあげることができるが、筆者の専門分野のひとつである比較認知科学分野でも、Comparative Cognition Societyが学会初日にサテライトシンポジウムを例年開催している。

Comparative Cognition Societyでは、"Memory and Metacognition", "Associative Processes and Relational Learning"などテーマごとに1時間ほどのセッションが生まれ、ヒト以外の動物が示す様々な認知機能について様々な側面から闊達な議論がなされた。筆者が特に強い関心を持つ連合学習のセッションでは、コンパレータ仮説の提唱などで著名なSUNY BinghamtonのRalph Millerの研究室から複数の発表があり、特に恐怖条件づけの復元効果をめぐる文脈制御の問題や順行・逆行干渉の影響について議論がなされていた。筆者の研究室でも、復元効果に関する研究を現在進めていることもあり、大変に興味深いものであった。

Comparative Cognition Societyのサテライトシンポジウムはすべて口頭発表であったが、Psychonomic Societyでは口頭発表とポスター発表が混在しており、筆者はポスター発表を行った。ポスター発表は、口頭発表やシンポジウムが行われる会場のホテルから通りを挟んだ向かいにあるコンベンションセンターで行われ、様々なテーマのポスターが掲示された会場では日本人研究者の姿も多く見られた。学会会期中は雨が多く、別の建物に出なければならぬのは若干不便ではあったが、会場自体は相当に余裕を持って設定されており、ポスター発表の空間的余裕は素晴らしかったと言える。筆者は、ラットが示す衝動的行動がニコチンの急性投与や慢性投与によってどのような影響を受けるのかについて検討した実験の結果を報告した。衝動的行動とは、「ダイエットをしているが目の前のケーキを食べるのを我慢できない」や、「ギャンブルがやめられない」など、多様な属性をもつものであり、心理学の中でも「直後に得られる小報酬と遅延後に得られる大報酬」の選択場面において検討されるセルフコントロール課題などを用いて多くの研究がなされてきた。今回の報告では、大学院生の室田尚哉君、東京慈恵会医科大学の宮田久嗣先生との共同研究において開発したレバーホールディング課題に関する知見を取り上げた。レバーホールディ

ング課題では、被験体のラットは一定時間にわたってレバーを押し続ける行動が要求され、課題を達成した時点で脳内報酬系への電気刺激が報酬として与えられる。この際に、要求された時間までレバーを押し続けることができなかつた場合を「待てない行動」、報酬が与えられた後にもレバーを押し続けてしまう行動を「やめられない行動」と考え、これらの行動に対してニコチンが与える影響を検討したところ、ニコチンの急性投与は「やめられない行動」をむしろ低減すること、またニコチンの慢性投与状態からの離脱は「やめられない行動」を大きく亢進することが示唆され、ニコチンの持つ衝動性への影響に関して直感的な理解とは異なる結果が得られた。これらの結果については、前述のRalph Millerなども興味を示してくれたようで、いろいろな議論を行うことができた。

学会そのものについては、自分の発表を含め有意義な時間を過ごすことができたが、学会会期中に会場のホテルを"Occupy Wall Street"系のデモ隊が取り囲み、警官隊と衝突するという出来事があった。どうやら同時期に大手金融機関の幹部によるイベントが開催されていたらしく、我々が食事などでホテルを離れてから戻る際にも、警官隊によるチェックを経ないとホテルに入れないといった状況であった。その際に警官から「お前たちはデモ側の人間に見える」と言われたのは、誉められたのだと思っではいるが何とも微妙な気分であった。